

上を有する者は認められ、それに満たない者は他人の実績を譲り受け・譲り渡すなどのいずれかの方法によって、進退を明らかにしなければならない」などの、厳しい取り締まりを受ける。「転業した家には、営業譲渡金が支払われ、諸道具類も評価して国が買い取り」を行なったという。これにより、「まず、昭和十四年（一九三九）の調査で、川越の菓子製造業者が四十八軒にまとめられてしまう」。さらに「第二回目の調査では、たったの四軒」しかなくなり、「あとは全部店をたたんで、工場に働きに出た」そうだ。

「統制当初は、量的には少ないにせよ、原料を毎月必ず購入できた」ようで、「何とか営業を続けていたが、しだいに諸原料が減り、一か月の半分ぐらいしか仕事ができないありさま」になった。菓子の事情はますます厳しくなり、砂糖の輸入も途絶える。戦争末期には、日本国中、軍人以外は菓子の姿さえ拝むことができなくなった⁽¹⁰⁾。

(5) 戦後の再建

四軒まで減った菓子屋横丁にも、復活があるからこそ今がある。文献によると、「横丁が勢いを取り戻したのは、戦争が終わって七、八年経ってから」だった。戦争に行つたが、無事だった若い人が帰ってきて、張り切つた「そうだ。「戦争前の親方衆もまだ健在で、菓子の作り方もいろいろ教えてくれた」ようだ。戦前に作っていた菓子だけでなく、「ラムネ菓子やドロップなど」も作っていた。「原料も手に入る」ようになり、「世の中の人々がまだ口が肥えていなかっ

た」ということもあり、「そんなにぜいたくな生活ができるほど」ではなかったので、「横丁の菓子がちょうどよかった」ようだ。しかし、「それも長続きしなかった。よかったのは十年間くらい」。人々の「菓子の好みが急に変わった」のだ。「駄菓子という古いものには見向きもしなくなり、洋風の菓子」に変わった⁽¹¹⁾。

「日本全体がなんだかおかしくなっちゃって、フランスだ、アメリカだ、っていうものばかり流行⁽¹²⁾っちゃうんで、横丁は途端に閑古鳥⁽¹²⁾だよ。菓子屋に見切りをつけて勤めの出るしか方法がないんだから。もとの川越のまわりが、住宅地としてどんどん開けていくから、そっちへ引つ越す人も出てくる⁽¹²⁾」

「残ったのは、おじいさんやおばあさんの隠居仕事で、お店が開いているかどうか分からない」ところもあった。だが、時間とともに、「風向きも変わってくる。浮かれていた世の中がだいぶ落ち着いてくると、横丁がいつのまにか川越の名所・観光の場所となり、注目され



川越菓子屋横町にて（著者、平成24年8月7日）

(11) 松平（2005）59～63頁参考
(12) 同上、60頁引用

(10) 松平（2005）56～59頁引用、参考

ることになる⁽¹³⁾。

「でも、いまみたいに店の数も増えて、観光バスがひっきりなしに入ったり、観光のお客がごった返すようになったりすると、ご繁盛はご同慶の至りなんだけど、肝心の菓子は大丈夫かな、つて思うことがある。そりゃ、サツマイモを使った新しいお菓子をどんどん作り出しているお店もあるし、飴玉をいろいろ工夫して、にぎやかに店を張ってくれている親父さんもあるよ。みんな横丁を大事に盛り上げてくれてるよ。」

「ただ、横丁の菓子は、もう街の子どもが毎日食べてくれるおやつじゃない。ここらへんがね、ちよつと寂しくつて⁽¹⁴⁾」

このように、菓子屋横丁の歩みを見ていくと、当時の日本社会自体が山あり谷ありだったということがよく分かる。そのなかでも、私は砂糖という物資の影響によるものだけでなく、人々の好みの変化という部分に注目した。第一章でも述べたが、駄菓子が生まれた当初の「駄菓子」と、今の子どもたちの考える「駄菓子」には違いがある。芋菓子や和菓子は「駄菓子」という分類よりも、「和菓子」や「昔ながらのお菓子」「郷土菓子」というくくりになってきている。

(六)菓子屋横丁の現状

菓子屋横丁では、お菓子をつくってその場で売るとい店は少なくなっているようだ。菓

子屋横丁の現状を松陸製菓さんに伺うと、次のように話していた。

「私は、つくって売るといのが魅力だと思いますし、ここ(菓子屋横丁)のテーマだと思います。でも、最近では、ただ仕入れた駄菓子を売るといことが、駄菓子屋さんといイメージになってしまっていると思います。ここにいる人たちは、みんな職人だと思つて、自分のところのものをつくっているとい気持ちです。」

昔から今まで、同じ気持ちでやっていますが、だんだんと少なくなつてしまつた店舗に、新しく駄菓子屋ができたとい感じで、あれでは、駄菓子をただ並べているとい感じだけだと思つています。仕入れた駄菓子をただ並べて売るといこと＝駄菓子屋、とい考えが先行されているといことがあるので、少しさみしい感じがします。もともと、職人の街といことで、やつてきたので。昔は、自分の家で

つくつて売るといのが主ですからね。そういう原点の部分の店が少なくなつているといのもあります。後継者の問題や、家からどんどん人がいなくなつてしまつてい状況になつてくると、やはり



菓子屋横丁の街並
(著者撮影 平成24年8月7日)

(13) 註 11 に同じ、59～63 頁参考

(14) 松平 (2005) 63 頁引用